

焦点

地域特性を戦略的に生かす ～「鶴岡バイオキャンパス特区」の挑戦～



鶴岡市総務部企画調整課 課長代理 富樫 泰

今年四月二十一日、鶴岡市の構造改革特別区域計画「鶴岡バイオキャンパス特区」について、小泉総理から、第一次認定書の交付を受けた。

この特区制度は、昨年十二月に成立した構造改革特別区域法に基づくが、これまでの地域振興策とはかなり異なった性格を有している。例えば、地方公共団体等の提案により制度設計が行なわれたこと、国があらかじめモデルを示していないこと、従来型の財政措置が講じられないことなど、さまざまな特筆すべき特徴がある。本市として最も関心を寄せたところは、他の自治体も同様と思うが、規制は全国一律にという考えを改め、地域の特性に応じて規制の特例を導入し、そこから地域の活性化を導こうとする点であった。そこで、鶴岡地域の将来の発展に生かせる地域の特性は何かという観点から、農業などを含む広い意味でのバイオに焦点を当てた。

平成十三年四月の慶應義塾大学先端生命科学研究所開設を契機に、鶴岡市は、バイオ産業などの集積を図ることを目的にサイエンスパーク整備の調査事業を行ってきた。この調査の中で明らかになったことは、高速道路や空港など、社会資本の整備を前提にすれば、本市地域は、地方都市としてバイオ産業を育成するには極めて恵まれた環境にあるということだった。その理由は、第一に、農業の素晴らしい伝統があるということ。歴史的に見ても、恵まれた自然を背景にした豊かな農業生産を通じて、過去一千年、大変豊かな地域として栄えてきた。品種改良や農業技術開発などにおいても、全国的に貢献し、わが国農業をリードしてきた。今、農業は大変難しい

時代を迎えているが、地域の農業者の意欲は高く、引き続き日本の農業のけん引役を果たそうとしている。

第二に、山形大学農学部がある。国立大学の農学系学部は全国に四十一学部（鶴岡市企画調整課調べ）あるが、県庁所在地以外の小都市に所在するのは数少ない。あるだけでも非常に恵まれているのだが、これまでの地域をフィールドにした素晴らしい研究教育活動の実績、近年の共同研究への取り組みなど、そこには地域のこれからの発展の大きなエネルギーが蓄えられている。

第三に、バイオインフォマティクス（注1）の分野で世界最先端の研究開発を行っている慶應義塾大学の研究所がある。こうした先端の研究機関が地方都市にあることはわが国では極めてまれであり、その研究成果を活用した新しい産業の創出に期待が高まっている。

以上の三点のセット、つまり、農業の素晴らしい伝統、山形大学の地域に根ざした総合的な研究開発、慶應義塾大学の超先端バイオ研究が三位一体となっていることは、他のどの都市にもない鶴岡独自の地域特性であり、また、バイオに関する重層的な特性である。「鶴岡バイオキャンパス特区」は、まさにこうした地域の特性を地域の活性化のために顕在化させようと立案された。高度で最先端の研究から産業開発、そして市民の基礎的な学習や交流活動まで、地域特性に対応した重層的なプロジェクトが盛り込まれている。

具体的には、優秀な外国人研究者の日本離れの傾向に歯止めをかけ、招きやすくするための出入国管理の特例、大企業だけでなく地域の中小企業でも山形大学農学部との共

同研究を進めやすくするための条件の特例、学習交流型の市民農園の開設に必要な農地の特例、以上三つの規制緩和の事業を中心に構成されている。

既に、慶應義塾大学の外国人研究者三名が特例措置を受けたほか、鶴岡特産「だだちゃ豆」に関する共同研究に向け、山形大学農学部と鶴岡市農協の協議が開始されている。また、NPO法人「エコリング」が、今秋に市民農園を開設すべく準備も始めている。

また、特区を通じた規制緩和の事業以外にも、本市では、従来から研究してきたサイエンスパーク構想の推進やバイオ関連企業の誘致を一層強化していくこと、さらに、バイオ

に関するさまざまな市民の学習活動をプロジェクトとして位置付け、市全体をキャンパスに見立てながら、学习交流、研究開発等の機会を創出し、産業の各分野で企業や市民の活力を引き出そうとしている。これらは、慶應、山大での研究をさらに拡大させつつ、産学連携を一層推進しながら着実に地域経済の発展に結びつけていくこと、農業やバイオの素晴らしさを大勢の市民の皆様に楽しく学んでいただきながら、バイオの時代に対応した人材育成を図ることなどを狙いとしている。

政府のバイオテクノロジー戦略会議によれば、バイオ市場は二〇一〇年に二十五兆円規模、二〇一一年の約二十倍に達することが予想されている

など、バイオは今後の成長が確実に見込める最大の産業であることもあり、希望を持って挑戦できる。加えて、研究や教育などを尊ぶ鶴岡の昔からの市民性も、将来を明るく照らしてくれている。

構造改革特区は、地方が「自助と自立の精神」を持って、「知恵と工夫の競争」を行うものと、政府ではその意義を定めている。つまり、冒頭で述べたように、国は財政措置を講じず、モデルも示さない。その代わり、自由な発想で地方がお互いに競争し、その中で活力を引き出せ、ということである。いよいよ、本格的な地域間競争の時代を迎えた、こうした思いを強く抱かざるを得ない。鶴岡バイオキャンパス特区は、この競争に負けない仕組みづくりの一環である。本市の恵まれたバイオの環境は、鶴岡の先人の皆様が大変な努力をして築いたもの。受け継がれたせっかくなの貴重な地域特性を、新しい時代にふさわしく戦略的に生かして、活力あるまちを次世代に渡したい。このためにも、ぜひ、地域の研究教育機関、産業界、そして市民の皆様と一緒に力を合わせて取り組んで参りたいと思う。

(注1) 生命の設計図であるゲノム配列情報やDNAチップによる遺伝子発現情報といった膨大なバイオ情報を、コンピュータを用いて解析したり、関連ソフトウェアを開発したりするバイオサイエンスと情報科学の融合領域を対象とした研究分野のこと。



山形大学農学部先端教育研究棟

鶴岡市バイオ産業の研究拠点とされる
大学研究機関



慶應義塾大学先端生命科学研究所バイオラボ棟

想されているなど、バイオは今後の成長が確実に見込める最大の産業であることもあり、希望を持って挑戦できる。加えて、研究や教育などを尊ぶ鶴岡の昔からの市民性も、将来を明るく照らしてくれている。

富樫 泰

鶴岡市総務部企画調整課課長代理。
昭和34年生まれ。
昭和59年、鶴岡市採用。
社会教育課、企画調整課、庶務課を経て
平成12年、企画調整課企画主査。
平成13年より現職。

鶴岡市「バイオキャンパス特区」の
ホームページ
<http://www.city.tsuruoka.yamagata.jp/01/kikaku/biocampus/>